

松山城三之丸跡 15 次調査

所在地

松山市堀之内（市営競輪場跡地北西部）

期間

平成22年9月1日～平成23年3月中旬(予定)

面積

約 320 m² (予定)

概要

今回の調査は、昨年度の13次調査で確認された侍屋敷範囲内の建物跡などを確認するために実施しました。調査の結果、江戸時代の建物の礎石や東石の一部、建物に關係する石列、井戸及び廃棄土坑、そのほか旧陸軍（歩兵第22連隊）の建物跡などを確認しました。

建物の礎石と東石（つかいし）は、17世紀前半頃のものと考えられるものが11基検出されましたが、その他は近代以降に破壊されたため残っていませんでした。しかしながら、廃棄土坑（ゴミ穴）が一定箇所を避けるように検出されたことから、建物があったおおよその範囲を知ることができました。廃棄土坑の中からは、幕末を中心として江戸時代全時期（17～19世紀）の様々な地域の陶磁器や瓦が出土しています。また、石列は、礎石列に並行していることから、犬走りあるいは縁束と考えられます。井戸は2基が確認され、その1つから漆器碗が出土しています。そのほか、用途は明確ではありませんが、瓦のみが捨てられた、あるいは敷かれた土坑などが見つっています。

22連隊の建物跡は、便槽（埋糞）が並んで検出されたため、便所棟と考えられます。

出土物として特徴的なものは、石塔の頂上部に使用される「相輪（そうりん）」です。これは、この屋敷地の庭に層塔などが建てられていた可能性を示すものです。また、松山城築城以前の古い技法「コビキA」を使った丸瓦が出土しています。これは、築城時に加藤嘉明が前任地の正木城（伊予郡松前町）、あるいは廃城となった湯築城（道後）から運ばせた瓦の一部かもしれません。

用語説明

●相輪

相輪とは、層塔など石塔の最上部の棒状の部分のこと。相輪は層塔以外にも、宝篋印塔（ほうきょういんとう）宝篋、多宝塔などにも見られ、単なる飾りではなく、釈迦の遺骨を祀る「スツーパー」の原型を残した部分といわれている。

●コビキAとコビキB

考古学の用語。「コビキA」とは、瓦の原材料となる粘土板を粘土塊から切り出す際に、撚り糸を使って切り離す技法（糸切り技法）および痕跡のことで、瓦の凹面に撚り糸がスライドした粗い斜め方向の痕跡が残る。また、「コビキB」とは、鉄線を使って切り離す技法（鉄線切り技法）および痕跡のことで、瓦の凹面に鉄線がスライドした滑らかな水平方向の痕跡が残る。この技法は、全国的にみて地域差はあるが、16世紀末頃からAからBへ変化することが分かっている。

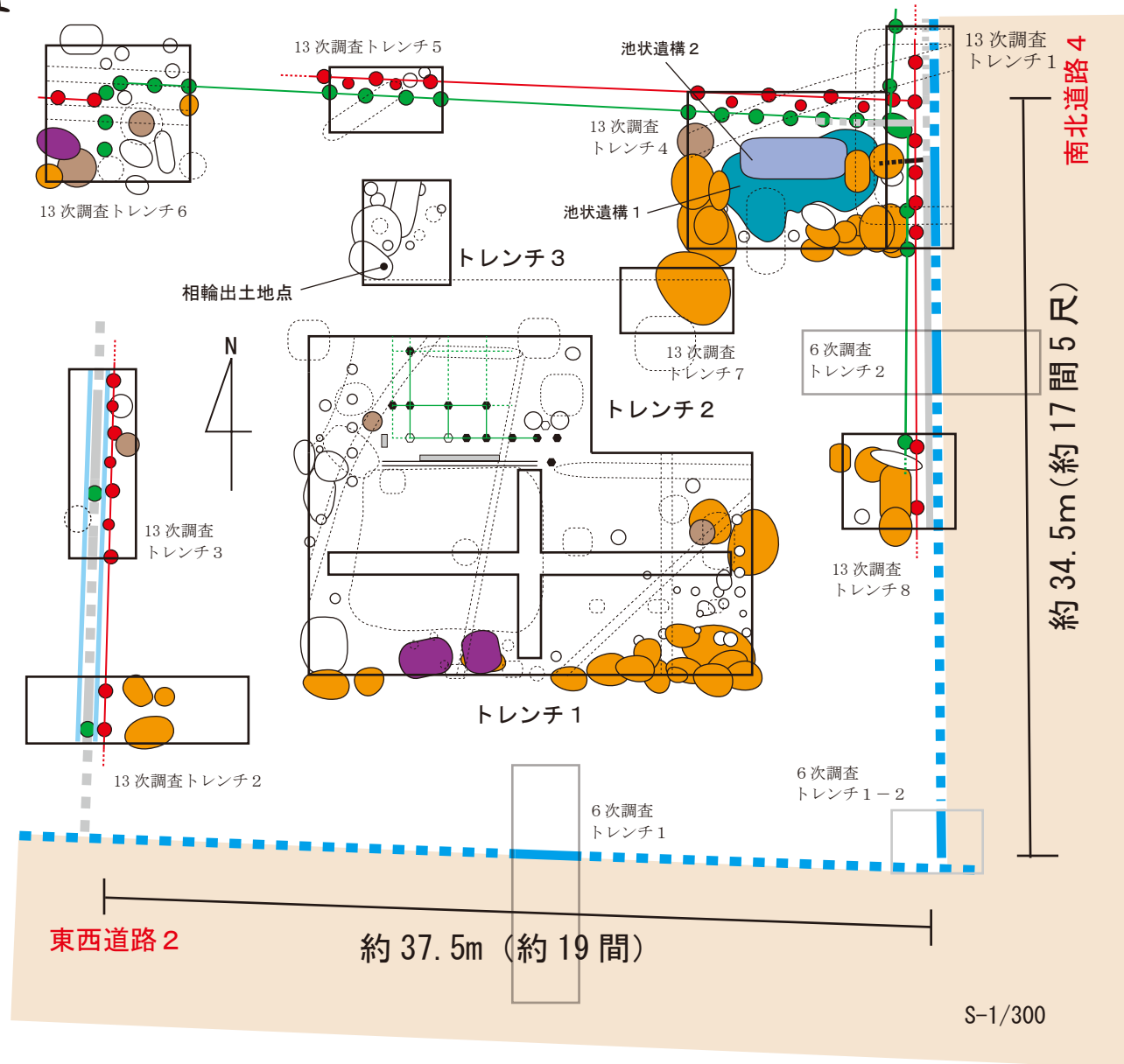


図1 遺構平面模式図

【凡例】

- 肌色・・・道路 水色・・・道路側溝 緑色・・・柱穴（1期）
- 赤色・・・柱穴（2期） 灰色・・・石列 黒点・・・礎石
- 橙色・・・廃棄土坑 紫色・・・瓦敷き土坑 茶色・・・井戸
- 点線・・・撚乱

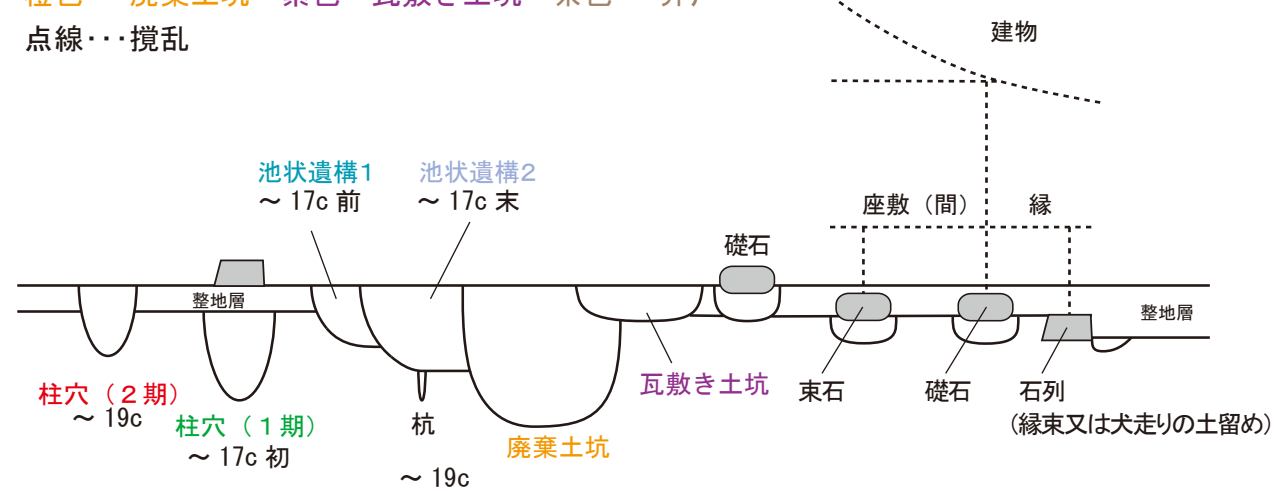


図2 遺構断面模式図

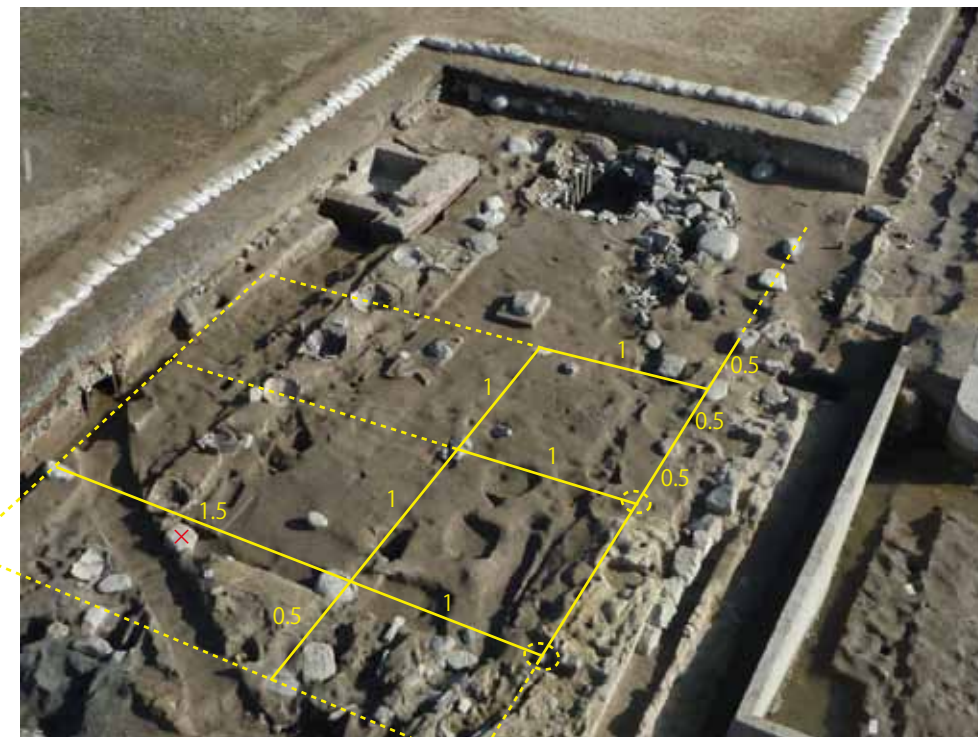


写真1 礎石建物遺構



写真2 瓦敷き土坑



写真3 井戸から出土した漆器碗

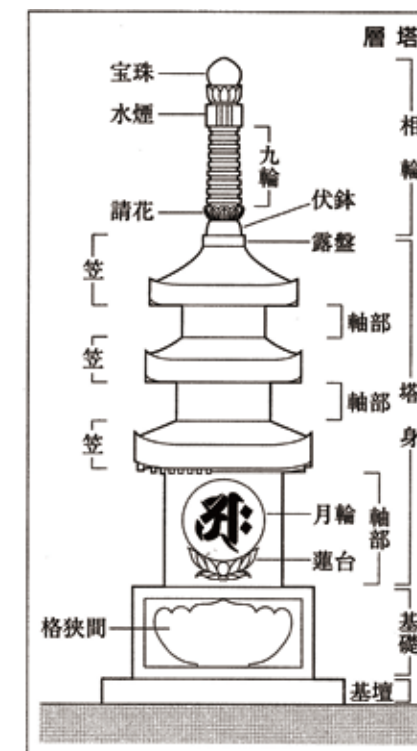


図3 層塔の部位の名称
(山川出版社『板碑と石塔の祈り』より)

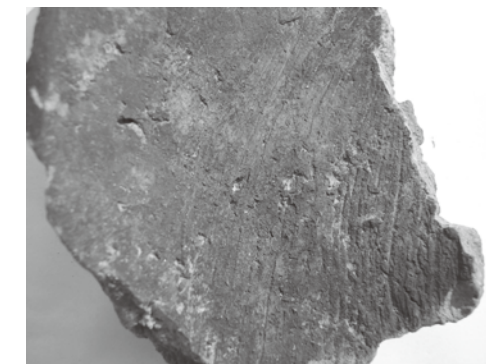


写真4 コビキAの丸瓦の凹面



写真5 コビキBの丸瓦の凹面